

## 4 英語・外国語教育(アラビア語・日本語など)

\*英語に関しては、第二主要言語(公用語)としての位置づけであり、日常生活のあらゆる場面で高い頻度で使用されます。学校教育では小学校から高校まで必修科目として教えられています。「聞く」「話す」中心の学習に始まり、次第に「読む」「書く」能力をふまえた4技能を伸ばして、英語でコミュニケーションを図ることができることを目指したカリキュラムなっています。レベル的には小学校修了段階で日本の中学3年程度までの単語・文法は全て学習します。

\*様々な民族の子どもたちがいる関係から、彼らの日常生活や文化的習慣を含めて英語で理解し、表現できる能力を育てようとしています。

\*英語教育のレベルは、小学校段階でほぼ日本の中学3年間の学習内容が終了し、6年生ではかなりの長文を読みこなすようになりまますので、日本と比べてかなりペースが早くレベルは高いといえます。低学年まではオーラルコミュニケーション中心ですが、4年生あたりから次第に文法事項や長文読解、英作文に重点が置かれていきます。6年生では語尾に-en を付けて動詞化したり、-ion を付けて名詞化したりするなど、派生語の学習によって語彙をより増やす内容の学習も見られます。

\*このように非常に重要されている英語ですが、実際マレーシアを訪れてみると、多くの民族や外国人が混在している都市部では、大部分の人が英語を理解でき、会話などによる意思の疎通も可能です。しかし、地方に行くと、その大部分はマレー系住によるコミュニティの中で生活しているため、英語を話す機会はずっと少なくなります。したがって、同じマレーシア国内でも、地方ではあまり英語が通じないことも多く、子どもたちも、都市部の子どもと比べて英語が苦手という割合が大きくなるなど、地域によって格差が見られます。

\*小学校の基礎を踏まえて、中等学校ではさらに英語力を伸ばすため、ICT を利用して幅広い知識を身につけ、英語で理解し表現するなどの学習が進められています。

\*グローバル化、科学化への対応として、高等教育機関でも1994年以降理系学部を中心に英語での教授が認められるなど英語使用への規制緩和が進み、現在、多くの私立大学を中心に、授業の大半を英語で行っているところが増加しています。

\*さらに、2003年1月より小学校と中学校1年次から漸次、理数科目を英語によって教えるようになった以降(※この施策は2012~2014年に段階的に全学年で廃止)、私立学校を中心に、幼稚園段階から英語教育は盛んで、教授言語を全て英語としている園や、英語・マレー語・華語などによってクラス分けをしている園、さらには、マレー語、中国語、英語、あるいはマレー語、アラビア語、英語等の二言語ないし三言語を同時に学習する園や小学校も多く見られます。

\*第二・第三言語学習は、マレー系の児童・生徒はイスラームの聖典であるコーラン(クルアーン)を読むようにするため、小学校の第1学年からアラビア語を学びます(実際には幼稚園や保育所の段階から学んでいるところも多い)。アラビア語は基本28個の「独立形」と呼ばれる文字の読み方・書き方を覚え、次に、単語の中のどの位置その文字が来るかで、「語頭形」、「語中形」、「語尾形」の三つの形に変化します(単語の最初の文字は語頭形、途中は全て語中形、最後の文字は語尾形)。書き方は、横書きで、単語も文章も「右から左」に向かってつなげて書き、読むときも同様に「右から左」に読みますので、疑問文の場合は、文末(文章の左端)に、左右反転の疑問符「?」→「؟」が付きます。

\*中国系・インド系の児童は、それぞれの民族語(華語/タミル語)を教授用語とする小学校に通った場合、第1学年から国語としてのマレー語の他、公用語・外国語として英語を学び、中等学校入学以降、教授用語が全ての科目でマレー語になると、必修科目のマレー語・英語に加え、選択科目として、以下の8言語(中国語、タミル語、アラビア語、イバン語、カザダン語、フランス語、ドイツ語、日本語)から1つ、ないし複数科目を選んで学ぶ生徒もいます。このうち、日本語の科目は公立の中等教育機関では約130校、大学などの高等教育機関では16校(2016年度)で開設されており、選択者は約4万人弱(2018年度)で、前年度比18%増、世界10位の多さです(国際交流基金調べ・2020年)。